あらすじ

物語は、独り暮らしの桜庭香寿美が倒れた所から始まる。
脳溢血で緊急入院したという知らせを受けて、息子の俊也が駆けつける。医者は、予断を許さない状況だと告げる。香寿美はベッドで寝ている。すでに、息子の陸が香寿美のそばについてた。父親である俊也と陸は険悪な雰囲気。やがて分かってくることだが、俊也は離婚していて、陸は妻の瞳子と生活していた。

と、香寿美の意識が戻る。喜ぶ陸。
香寿美は、ベッドから身を起こし、陸を見つめる。少し頭が痛そう。陸が「おばあちゃん、大丈夫?」と声をかける。香寿美は、陸の顔をまじまじと見つめ、そして陸に「健二郎さん」と呼びかける。陸は戸惑うが、香寿美は、「健二郎さんたら、また、からかって」と返す。さらに現れた息子の俊也には「どなたですか?」と本当に誰だか分からない様子。陸と顔が似ているから「健二郎」の父親だと決めつけ、噛み合わない会話のまま、疲れた香寿美は寝る。
意識を取り戻した香寿美に医師が質問をすると、香寿美は生年月日を正しく答えたあと、歳は20歳だと言った。自分は大学生だと思っているらしい。「健二郎」というのは、5年前に亡くなった香寿美の夫の名前だった。つまりは、香寿美は、孫の陸を見て、まだ恋人だった頃の健二郎と思っているのだ。たしかに、陸の顔は彼の祖父、健二郎に似ていた。

医者は、「アルツハイマー型認知症」だと告げた。医者が言う。とにかく、否定しないこと。否定したら、混乱するだけになるから。

目を覚ました香寿美は、病院を抜け出して行きたいところがあると陸に言う。
そこは、かつて香寿美の実家のあった相模原だった。香寿美は、陸に「ベトナム戦争」についての意見聞く。

以前からちょくちょく香寿美の家に寄っていた陸は、香寿美が倒れたところを発見し、救急車を呼んだ。そこから、陸はずっと家に帰らず香寿美に付き添っている。母親の瞳子から電話がかかってきても、頑なに帰ろうとせず、大学には行かずに祖母の面倒を見ると言う。

俊也は、会社でトラブルが発生し、忙しそうだが、陸に香寿美を任せっきりにするわけにも行かず、会社と病院、香寿美の家を行き来することになる。

俊也と陸は、香寿美の妄想を否定しないために、香寿美を守るために、少しずつ会話を始めた。